

しらさぎ山のクマたち

赤座憲久・作/武部本一郎・え



創作子どもの本

しらさぎ山
の
クマたち

赤座憲久



金の星社

しらさぎ山のクマたち

創作子どもの本

初版発行／1975年1月©

第7刷発行／1980年2月

著者／赤座憲久

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3

電話／東京03-861-1861 (代表)

振替／東京0-64678

印刷／(有)協栄印刷

製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

913 赤座憲久

しらさぎ山のクマたち

金の星社 1980

137P 22cm (創作子どもの本)

基本カード記載例

8393-041081-1406

創作 子どもの本

しらさぎ山のクマたち

赤座憲久



バスの終点^{しゆうてん}から、谷川にそってのぼる細い道は、かっぱとうげに続く。そのとうげの道を、いくつも折れまがってのぼりつめると、ずうっと下の方に、ユウイチの村が見えはじめる。

山やまにかこまれたその村には、わらぶきやねの家が、四、五けんずつかたまっている。

ひと月ほど前、ユウイチの家にテレビがついた。大きな山にかこまれているので、画面^{がめん}のはっきりしないこともある。

ゆうべチャンネルをまわしたら、むりやり客を電車におしこんでいるプラットホームがうつっていた。東京のどこかの駅^{えき}のようだった。

だが、この山おくの村では、とても思いもよらない。

ユウイチの村のニュースといえば、山しごとの帰り道で、親子づれのクマを見たとか、大きなハチの巣をとって、ハチの子めしをばらいつぱいたべたというようなことだ。

ある晩、とつつあんがいろいろばたで、三年生のユウイチと、五つになったトヨジに話しはじめた。

「クマってやつはな、なかなかかわいいもんや。うん、そのう、一週間ほど前、いらさぎ山のすみやき小屋へいく道で、大きなクマの木を一本、きりたおそうとしたんや。」

そうしたらさ、その大きなクマの木の下に、クマの親子がきておった。」

「……………」。

ユウイチは、とつつあんの方へ思わずからだをのりだした。

「おっかあグマはな、クリの実^みを、いがからとり出しては、かわるがわる、二頭^{ふとう}の子グマにたべさせとった。うん。ころころしあつてな、その子グマたちや、おっかあグマのしてくれるのが待ちきれんみたいに、手つだらうんや。」

そうして、いたいていうみてえに、足をひょいと持ちあげたり、おっかあグマにからだをすりよせたり……。」

「はっはっはっはっ、そいで……。」

ユウイチは、いつそう話につりこまれた。トヨジも、とつつあんの顔をみつめている。

「子グマが、クリのいがにさわって、いたそうに足をあげると、親^{おや}



グマが、そこをなめてやるんや。

おらはな、おそいかられそうになったら、いつでも、さっさと
げられるようにして見ておった。」

「……………」

「親グマだけならまんだいいが、子どもづれのクマちゅうやつは、
よっぱど氣いつけんといかん。むかしから、そう言いつたえられと
る。」

「……………」

「そのうちに、じろうとおっかあグマが、おらの方を見よった。
おら、思わずあとずさりした。でもな、おそいかつてはこなんだ。
そんなことで、クリの木きるのはやめて、べつの方をまわって、す
みやき小屋へいった。」

とつつあんの話では、つぎの日も、そのつぎの日も、おなじ親子のクマが、そのクリの木のところへ、クリの実みひろいにきていたそうだ。

五日めには、子グマがいがから実みをとりだすのを、親グマが、じっと見ていたと話した。そしてクリの木は、とうとうきりたおすことができなかったと、とつつあんは話をつづける。

「ところで、ユウイチやトヨジに話したかったのは、きょうのことや。

きょうはな、子グマがよちよちころと、おらの方へよってきた。おら、おいずる（山仕事はどうぐなどを入れ
る）せおいかごの中から、ぎりめしを出して、そいつにやった。ようこえて、ころころしとる方が、ぱくつとくわえていった。

はっはっはっはっ……もう一頭の子グマも、ほしそうな顔しottaで、そいつにもやった。どっちも、おっかあグマんとこへいって、これをもらったといわんばかりに見せとった。

おっかあグマはな、うんうんとうなずくようなふうをするのさ。そうして、子グマがむっちゃむっちゃとたべるのを見とった。」

ユウイチは、目をほそめて笑った。

「はははははっ、とつつあん。あした、おらをつれていけよ。」

「うん、いくか。ようし、つれていこか。そのおっかあグマはな、八十キロはたっぷりありそうや。なんども顔あわせとるうちに、おそいかかってきそうには、思えんようになった。」

トヨジは、下のおとうとのヨシゾウがねたので、おっかあひざにもたれ、とつつあんユウイチの顔を、見くらべながらきいていた。

つぎの日、ユウイチは、とつあんといっしょに、山へ出かけるしたくをした。とつあんの身なりは、いつもおなじだ。

地下たびをはいて、つぎきれのあてである作業ズボンの足首を、ひもでしぼる。こしのナタ入れにはナタ、おいずるの中には、ノコギリ、マサカリ、ロープなどを入れた。

トヨジの下したの弟おとうとヨシゾウが生まれるまえは、おつかあも、とつあんといっしょに山へいったが、このごろは、うちの土間どまで、すみだわらをあんでいる。

ユウイチは、おつかあのことさえてくれたにぎりめしを、おいずる

の中にいれ、とつつあんについて、山道をのぼっていった。

道にはみでている雑木そうぎの根ねっこを、とつつあんはひよいとまたぐが、ユウイチは、うんと大またにまたぐ。

「とつつあん、まんだか？」

「うん。あの尾根おねのくぼんだところから、ずうっと左へさがった、あのあたりや。」

とつつあんがゆびさしているのを聞きながら、ユウイチの息いきははずむ。

見はらしのきくところへ出て、二人ふたりはひとやすみした。冬にはいった空の色が、山の尾根おねの線せんを、くつきりえがいている。

むこうの山と山が、かたを組みあったようになっていて、そこから、子グマのような雲がくびをすくめる。



note T

「さあ。」

とつつあんが歩きかけると、ユウイチもあとにつづく。

とつつあんの足ははやい。

ユウイチは、木につかまったり、草のかぶをにぎったりして急ぐ。
ときには、すがたを見うしなうくらい引きはなされる。

二人の間がへだたると、とつつあんは立ちどまって、うしろむいて笑う。ほおをまっかにしてユウイチが追いつく。とつつあんが、
「あのクリの木や。」

と指さすと、そこに大きなクリの木がつたっていた。

へクマの親子は、きているかな? ユウイチは、歩いていきながら、
自分のむねがつくんつくんと、音をたてはじめたように感じた。

クリの木のすぐ近くまでいったが、クマはきていない。

「おや？ いねえや。」

クリの木の下には、いだけがちらかっている。

「きょうは、きていねえな？」

ユウイチは、気ぬけしてしまった。

「とつつあん。クリの木、きるのか？」

「どうしよう……。」

そのとき、ざさ、ざさ、ざさ、と音がした。

クマが、草むらをわけてくるような音がするのに、クマのすぐたは見えない。

二人は、今きた道をすこしひき返して、クリの木の下を見ていた。

「あんれ、きた、きた。」

「おつかあグマが、いねえぞ。」

「おっかあグマ、どうしたのかな？」

ころころと出てきた子グマが二頭、クリの実をひろいはじめた。

「そこいらに、おっかあグマがいるにちげえねえ。」

「……とつつあん。にぎりめし、やってもいいか？」

「うん。やってみい。」

ユウイチは、じぶんのおいずるから、にぎりめしをとりだした。

そいつをひとつ手に持ってさし出すと、まず一頭が、ころころやってきた。

「ほいほい、コロツカ。」

ころころっときた子グマが、顔を急に近づけたので、ユウイチは、思わず手をひいて、にぎりめしをおとしてしまった。

ところが、コロツカとよばれた子グマは、おちたのをひろって、